1085　VESTによる眼科手術時の心血管系反応に関する検討

瀬口秀孝、中村守男、深川和已*、蔵石さつき*、見好貴公*、青崎　登（国立霞ケ浦病院循環器科、*同眼科）

眼科手術（白内障）時の麻酔・手術操作等の心血管系への影響を検討した。　白内障患者8名（男4：女4、年齢65～87歳）を対象とした。術前に心プール検査を施行し、Capintec社製VESTを装着、術前・術中の心機能等の変化を評価した。　最大の変化を認めたのは瞬目・球後麻酔時で、各指標の変化は、BP不変（＋4.6±7.4%，mean±SD，n.s.)、HR増加（+24.7±8.7%，p＜0.01)、CO増加（＋85.4±45.8%，p＜0.01)、LVEF増加（＋45.4±40.5%，p＜0.02)、LVEDV不変（＋1.0±5.8%，n.s.)、LVESV低下（-22.3±26.2%，p＜0.05)、LVSV増加（+40.8±45.2%，p＜0.05）であった。　瞬目・球後麻酔時にHR増加と収縮力増大によるCO増加が認められた。

1086　2点体動補正法を用いた運動負荷心プールダイナミックシンチ法の検討

望月　守　福井　淳　神山　司　武澤　充　吉村　正己（静岡県立総合病院　核医学科）吉田　裕　坂田　和之（同循環器科）

運動負荷心プールシンチ検査時の体動補正は従来一点補正法であり、データの蓄積は逐次積算画像であった。今回、我々は心プール画像をR波付きダイナミックデータとして収集し、同時に収集したR波毎の体動補正用データ（Am線源、2点法）を用いて収集終了後補正する方法を試みた。体動補正後の心プールダイナミック画像を編集、心プールゲートイメージを作成する方法を考案したのでその方法並びに有用性を、また、プールイメージのみならず、運動負荷時First-passデータ（Tc心筋製剤）についても検討したので報告する。

1087　大動脈弁閉鎖不全症におけるタリウム集積低下の意義　－弁置換術前後での評価－

堀ノ内治、古田利久、宮之原浩、小寺顕一、真田純一、有馬暉勝（鹿児島大学第二内科）

大動脈弁閉鎖不全(AR)患者の置換術(AVR)前後でSPECT像を比較し、集積低下の意義について検討を行った。対象はAVRが施行された7名のAR症例。SPECT像は短軸像(basal, Mid LV, apical)各々の6分割と長軸像の心尖部の計19ｾｸﾞﾒﾝﾄで視覚的に半定量化し、Tl defect score(TDS)を求めた(ﾀﾘｳﾑ集積低下評価：正常=0, 軽度=1, 中等度=2, 高度=3)。術前に比べ術後はTDSは改善を示し（7±5 vs 4±3，p＜0.01)、左室拡張末期径および収縮末期径は減少したが、左室駆出率(LVEF)、左室内径短縮率(FS)は有意差はなかった。術前TDSはLVEFおよびFSと、術前後でのTDS改善度はLVEFおよびFSの改善率と相関する傾向にあった。　TDSはARにおける左室機能障害を反映していると考えられた。

1088　^{201}Tl心筋シンチグラフィーにおける心筋摂取率測定の有用性の検討

東野　博、立花　正(宇和島社会保険　放)、中田　茂、棚田修二、菅原敬文、安原美文、濱本　研(愛媛大　放)、濱田希臣(愛媛大　二内)

^{201}Tl(TL)心筋シンチグラフィーにおいて、Planar正面像と側面像を用いて、心筋と肺の減衰を計算した方法で投与量に対する心筋全体の摂取率を測定し、有用性を検討した。　症例全体では、左室駆出率(EF)(^{99m}Tc-HSA)が高い症例ほど、MURが低い傾向が認められた。心拍出量(CO)(^{99m}Tc-HSA)とMUR、またEFとCO x MURの間には有意の傾向は認められなかった。さらに疾患別、高血圧重症度別にPressure Rate Product、EF、CO、MURの関係を検討した。　TLのMURはCOに対する冠動脈血流量の割合(体循環との分配係数)の指標であり、本方法による病態解明の可能性が考えられた。

1089　抗腫瘍薬を使用した2症例の心筋シンチグラムと病理組織所見の関係

辻　敦敏、小谷　訓*（浦和市立病院、小児科、放射線科*）、久保敦司（慶応義塾大学、放射線科）

抗腫瘍薬を使用した2症例の心筋シンチグララム所見と病理組織所見の関係について検討した報告である。

症例1は発症時9歳の男児、骨髄異形成性症候群である。抗腫瘍薬による治療を行ったが、経過中、臨床的にcardiotoxic な所見が認められた。塩化タリウム心筋シンチグラムでは左室前、側壁及び下壁の一部に集積の低下を認めた。症例2は神経芽細胞腫のstage Ⅳ、3歳の男児である。治療プロトコールに従い、抗腫瘍薬による治療を行った。塩化タリウム及び脂肪酸代謝心筋シンチグラムでは有意な所見は認められなかった。病理組織所見は、発症後15か月、35か月後のものであるが、心筋線維の変性、線維化が存在した。

1090　Hibernationの術前予測-運動負荷再静注^{201}TlSPECTおよび左室造影を用いた検討－

三浦裕司　吉田慎太郎　松尾信郎　井上　亨　木之下正彦（滋賀医大第一内科）

心筋Viabilityの評価に対する再静注運動負荷SPECTの有用性を明らかにするため，30例のOMIを対象にPTCA前の運動負荷再静注^{201}TlSPECTの結果を術前後の左室造影と比較検討した．画像解析は再静注像でfill-inの有無を視覚的評価し，局所%Tl-uptakeを定量的に求めた．左室造影所見はセンターライン法を用いて定量的に解析を行った．PTCA前後における壁運動改善を心筋Viabilityのgold standerdとして運動負荷再静注 ^{201}TlSPECT（fill-inの有無と%Tl-uptakeによる判定）の有用性を評価した．PTCA後の壁運動改善（Hybernation）を予測する上で%Tl-uptakeのみならず，fill-inの有無が有用であることが示唆された．

Presented by Medical*Online